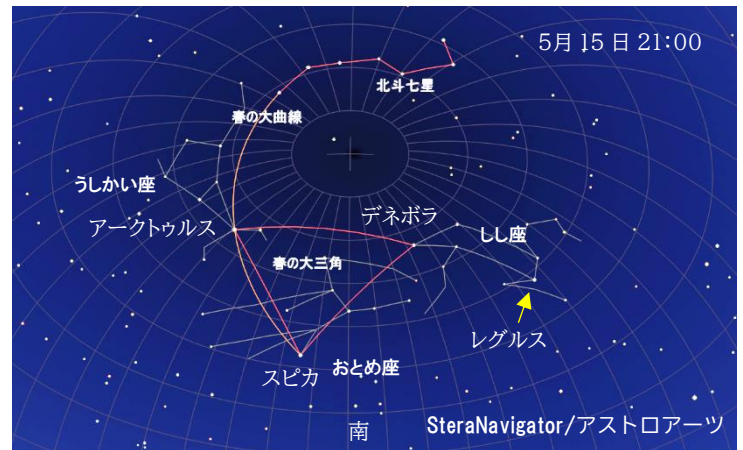


★今月の星もよう★

5月の宵の頃は、北の空の高いところにひしゃくの形をした7つの星の並びの北斗七星を見つけることができます。そのひしゃくの柄のカーブを伸ばしていくと、オレンジがかった明るい星、うしかい座の1等星アークトゥルスにたどり着きます。さらにカーブを伸ばしていくと、白く輝くおとめ座の1等星スピカに至ります。この北斗七星から伸びる大きなカーブのことを春の大曲線といい、アークトゥルスとスピカの2つの1等星と、しし座の尻尾にある2等星のデネボラを結んでできる三角形を春の大三角と呼びます。デネボラよりも明るいしし座の1等星レグルスは、しし座の心臓あたりで白く輝いており、「小さな王」「ししの心臓」といった意味を持ちます。レグルスから上の部分はしし座の頭部で、「？」マークを裏返した特徴的な星の並びになっており、「ししの大鎌」とも呼ばれています。北極星から春の大曲線、春の大三角をたどって、うしかい座、おとめ座、しし座などの春の星座たちを見つけてみましょう。



★みずがめ座 η 流星群★

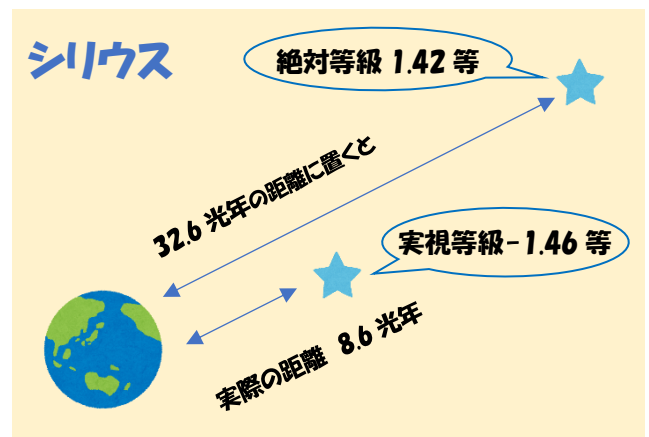
みずがめ座 η 流星群は、5月の上旬に見られる流星群です。最も多く出現するのは6日と7日の午前3時頃で、暗い所では1時間に5～10個見られると予想されています。流星群は放射点のみずがめ座付近だけではなく空全体に現れるため、空を広く見渡せる場所での観察がおすすめです。寒さ対策や安全に気をつけて観察してみましょう。

流星群は、彗星や小惑星が放出したチリが元となって発生します。みずがめ座 η 流星群は、「ハレー彗星」という彗星がその軌道上にまき散らしたチリの中を地球が通る時、チリが地球の大気へ飛び込んできて大気と激しく衝突し、高温になって気化したチリの成分や大気が光を放つ現象です。地球が彗星や小惑星の軌道を横切る日時は毎年ほぼ決まっているので、毎年特定の時期に特定の流星群が出現します。同じくハレー彗星が元となって発生する流星群に10月のオリオン座流星群があります。



★星の明るさ・絶対等級★

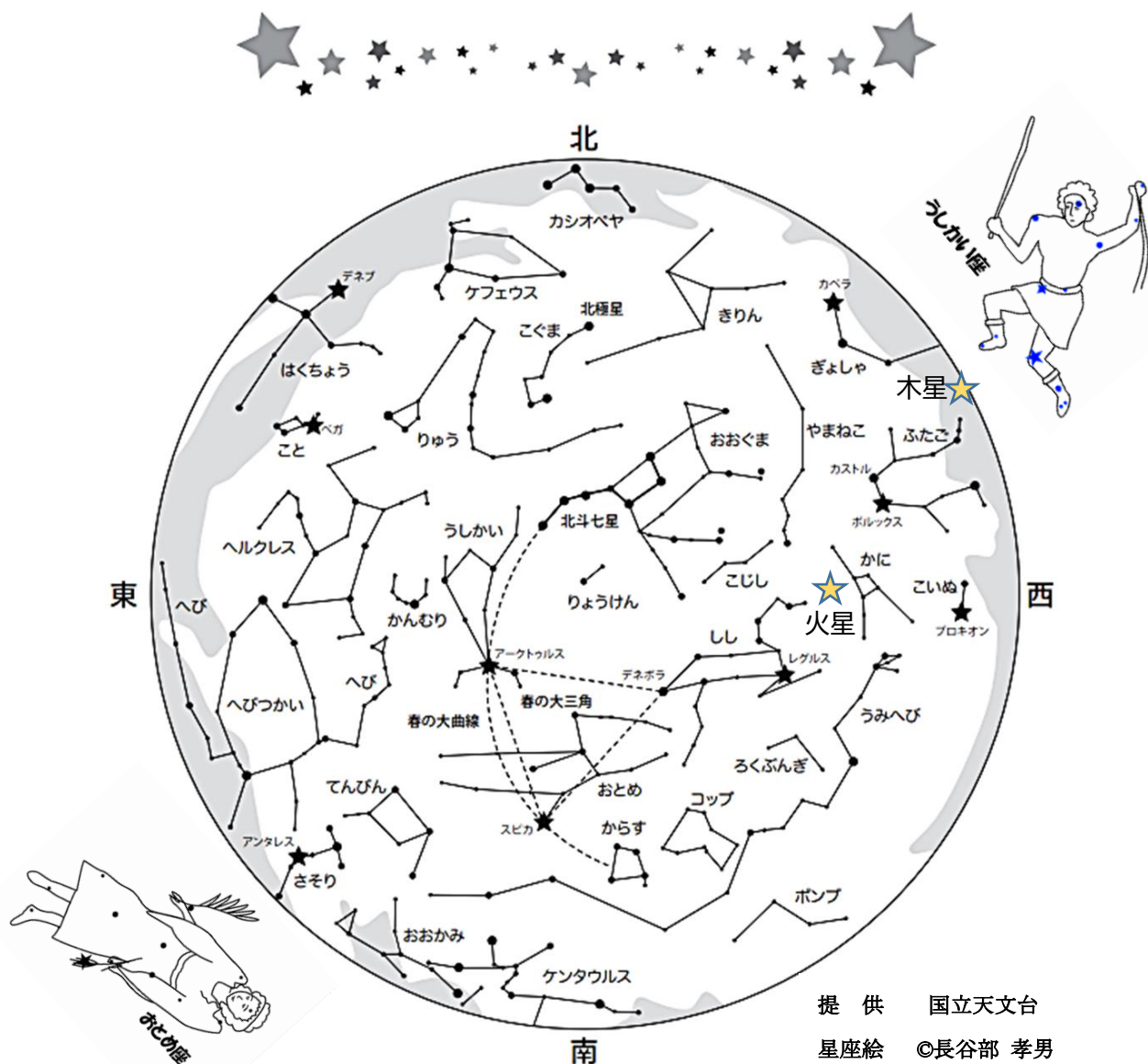
前号で紹介したとおり、星の明るさは「等級」という単位で表しますが、地球から見える星の明るさは、近い距離にある星は明るく見え、遠い距離にある星は暗く見えるといったように、地球との距離に左右されます。そのため、地球から見た明るさを示す等級は「見かけの等級」ということになります。一方、見かけではない元々の星の明るさは「絶対等級」で表します。これは星を一定の距離において比較するもので、具体的には、星が地球からちょうど10パーセク(32.6光年)の距離にあったとした場合の明るさを表します。太陽は地球から見ると-26.8等ですが、絶対等級では4.8等了。全天一明るい恒星シリウスは地球から見ると-1.46等ですが、絶対等級は1.42等となります。このことから、地球からは太陽の方が非常に明るく見えますが、実際はシリウスの方が明るいことがわかります。



☆プラネタリウムの内容については、別刷りの「投影案内」をご覧ください

☆プラネタリウムのお休み 5/7(水)、8(木)、9(金)、12(月)、13(火)、19(月)、21(水)、26(月)

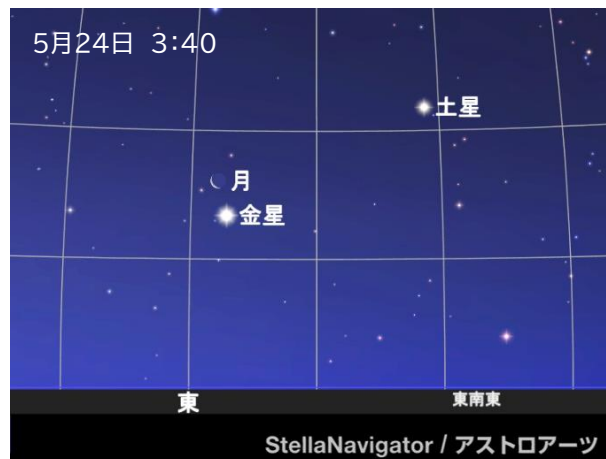
5月中旬午後9時頃の星空



提供 国立天文台
星座絵 ©長谷部 孝男

細い月と金星が接近

24日の夜明け前、月齢26の細い月と金星が東の空で接近して見えます。午前3時頃から午前4時頃の観察がおすすめです。細い月の暗く欠けて見える部分は地球に反射した太陽光(地球照)に照らされて薄くぼんやりと見えます。金星と接近する様子はとても印象的ですので、ぜひ観察してみてください。



★ 5月の主な天文現象 ★

- 4日(日) 上弦 (じょうげん)
- 5日(月) 火星とプレセペ星団が最接近 (かせい せいだん さいせっきん)
- 6日(火) みずがめ座 η 流星群が極大 (ぜ エータリゅうせいぐん きょくだい)
- 7日(水) 土星の環の消失 (どせい わ しゅうしつ)
(太陽が土星の環を真横から照らす) (たいよう まよこ て)
- 13日(火) 満月 (フラワームーン) (まんげつ)
- 20日(火) 下弦 (か)
- 24日(土) 明け方に月と金星が接近 (あ がた つき きんせい)
- 27日(火) 新月 (しんげつ)
- 30日(金) 水星が外合 (すいせい がいごう)